

ラフタフ第五回公演台本

バイバイ・ブラックバード

作・演出 萬野 展

登場人物

権田原 囚人。三十七歳。(籬英夫)

安岡 囚人。二十六歳。(松山聖一)

蒲郡 囚人。三十歳。(斉藤邦男)

水内 囚人。三十九歳。娘を殺した男。(萬野展)

精神科医1・所長・則子 (石田愛)

精神科医2・賄い婦・美津江 (杉山美奈)

精神科医3・アイドル・美香 (清水佳織)

【注記】この台本は九三年とどど企画本公演として、ピプランシアターにて上演されたものを改訂したものである。この台本の無断上演を禁ずる。

ACT・01 山頂

舞台は暗く静かである。
 暗闇から、人の気配が漂ってくる。
 息使い、唾を飲み込む音。
 数人の人間が身を寄せあって固唾を飲んで、そんな気配が伝わってくる。
 深く息を吸い込む音。
 そして

複数の声 … ヤッホー オオオオオオオオオオオ …

声は吸い込まれて消えてゆく。
 その余韻の中非常にゆっくりと明るくなりはじめ。
 五人の囚人服を着た男たち。

非常に高い山の頂きに、今、彼らは到達したのだ。
 限りなく広がる空間の、文字どおりの限りなさに彼らは口もきけないほど感動して
 いる。
 それは、山頂に到達した達成感や満足感からくる感動ではない。
 それほどの高みに登りながらも、なお自分たちの頭上に無限とも言える空間が、果
 てしなく広がっているというその事実が、彼らを圧倒している。
 彼らを打ちのめしているのは空間の広がりそのものなのである。

囚人1 ひろいな。

問

囚人2 …うん。

問

囚人3 …ひろくて…高いな。

問

囚人4 …なんにも無い、なあ…

囚人1 ああ。

彼らとはとにかく言葉を失っている。
 「なにもない」ことのインパクトがあまりに強烈で、そのことを口に出すことすら
 無意味に思える。

囚人2 (小声で) ヤッホー

おそるおそる、囁くように、確かめるように口にしてみる。
 彼らの感動は無力感と原始的な畏怖から成り立っているのだ。

囚人1 (やや大きく) ヤッホー!

囚人たち …。

囚人たち ヤッホー! ウォー! コノヤロー!

五人、徐々にエスカレートしていき、口々に喚き出す。
 しばし訳の分からないことを喚き尽くして、彼らは黙り込む。
 空気が薄い。

囚人3 ……こんなに広がったんだな、世界は。
 囚人2 ……ああ。
 囚人4 空が…（泣き笑いのような顔で）……まあいいや。

問。

囚人1 おい。おい！
 囚人2 ……どうした。

1は呼んだきり黙っている。
 見上げた2も沈黙する。

囚人3 なんだよ。

2は1の視線を追う。
 かなり上方を彼らは見ている。

囚人3 あ

ふたりが見ているものを3も見つける。

囚人4 なんだよ？

2は遙か上空の一点を指す。

囚人2 ホラ、あそこ。……黒い点みたいなの……ゆっくり動いてる……。

4もそれを見つける。
 彼らの視線は遙か彼方の、天蓋の一点に張りついて離れない。
 微動だにせず、それを見つめている。

囚人4 あれは……鳥……か？

囚人2 ……鳥だ。

囚人たち （口々に）鳥だ、鳥だよ……！

囚人3 こんな高い山の上のそのまたあんな……（うまい言葉が見つからず口だけパクパクしている）

一同、口をあげて黒い点に見入っている。

囚人たち ヤッホー！

問。

囚人3 あれ、なんの鳥だろう。

囚人2 さあ……。

囚人3 空気あんのかよ、あんなとこに。

囚人2 さあ……。

囚人3 えらいこっちゃ……

問。

囚人4 オレ……生きてるんだなあ……。

男たちの胸にその言葉が染み込む。

囚人2 生きてんだよ。なあ。

囚人3 うん。

囚人4 生きてるぞおっ！

生きてる、という言葉に触発され、再び彼らは叫び出す。
叫びずにはいられない衝動が、ときおり波のように襲ってくるのだ。
ひとりが崖から落ちそうになり、慌てて他のものが支える。

囚人3 …バカじゃないのか、俺たち…

囚人2 感動してるんだよ。

囚人2 人間感動すると、バカになるんだな。

囚人4 こんなに、こんなに感動したことないよ、俺…

囚人2 泣くな泣くな。

囚人4 だってさ、空が、空がさ…

囚人1 いつも鉄格子ごしの空しか見てないからなあ。

囚人3 そうだよ。外に出たって狭くなるしい猫の額みたいな庭からこんな（指で四角を作る）額縁みたいな空しか見えないもんなあ…。

囚人2 まったくだ。

囚人4 空が丸いんだぜ…畜生…

囚人2 泣くなつて…俺まで泣けてくる。

囚人3 バカだなあ。

囚人1 まるで…夢だな。

1のなにげない一言に、一同の動きが止まる。
全員が1を見る。
その顔は仮面のように無表情になっている。

囚人1 な…なんだよ。

囚人3 オマエ…、それを言っちゃあ、おしめえよ。

ジリリリ…と現実的なベルの音がどこからともなく鳴り響く。
あたりは急速に明るくなっていく。

囚人2 〓権田原、3 〓安岡、4 〓蒲郡は、糸で引かれるように囚人1 〓水内を残して散ってゆく。

後方につつすらと、鉄格子が見え、囚人たちはその向こうへと帰っていく。
現実が舞い戻ってくるその間際、娘が一人、水内を見ている。
水内はその娘の顔を良く知っているような気がする。
しかし思い出すことは出来ない。

夢は覚め、そこは刑務所である。

暗転。

ACT・02 脱獄計画

暗転明け。刑務所内である。
所長と新入りの囚人蒲郡がいる。
後方メイン舞台には、囚人たちがいる。

所長 鮎坂刑務所へようこそ。わたくしはこの所長をしております絵島史といいます。絵空事の絵、大島の島、フミは歴史の史です。

蒲郡 あ、ご丁寧に、どうも。(口の中でフツフツ)

所長 もう一度念を押しておきますが、いわゆる志願囚というのはここでは初めてのことなんですよ。いわば特例です。くれぐれも問題などおこさぬように。いいですね。

蒲郡 はあ。

所長 あなたのように、取材のために体験入所しようなどという申し出は、普通の刑務所ではまず許可されません。当刑務所は民主的で開放的な新しい時代の刑務所を目指していますから、特別に入所を認めるんです。

蒲郡 はあ。

所長 ご承知のように所内には様々な罪を犯した受刑者たちがいます。あなただけを特別扱いはすることはできません。あなたは他の囚人たちと全く同様に扱われます。いいですね。

蒲郡 …結構です。

所長 それでは簡単ですがわたくしから入所にあたっての注意を申し上げます。刑務所の生活で大事なことが幾つかありますが、その中でも特に大事なことがひとつあります。

蒲郡 …

所長 それは規則ということですが。在鑑者の皆さんにとっても、またここで働く職員にとってもそれは同じです。わかりますか。

蒲郡 はあ。

所長 所内の規則は先程お渡しした『所内生活の心得』という冊子に詳しく書かれていますのでこれをよく読み、分からないことは進んで職員に相談してください。そして一日も早く健全な社会人として社会に復帰できるよう、明るく、正しく、強く過ごして下さい。いいですね。

蒲郡 …はい。

所長 …言うまでもないことですが、刑務所のなかといえども、あなたの人権は保護されます。ただし。

シロリと蒲郡を見て、いつそう厳しく

所長 それはあくまでも制限された人権です。在鑑者の生活は、鑑獄法令の規定に基づいて自由が制限されています。外の世界での自由とは違うのです。そのところを八キ違えないように。わかりましたね。

蒲郡 はあ。

所長 (声を和らげ)とまあこんな具合にここに入ってくる人たちには最初にお話をするわけですね私は。参考になりましたか。(偉そうな態度)

蒲郡 …。は。とても。(卑屈な態度)
 所長 結構。それでは、同室の皆さんと仲良く。

所長退場

明かりが変わるとそこは雑居房。

三人の囚人たちがいる。

蒲郡、囚人のひとりにおそるおそる近づく。

蒲郡 ええ、ごほん、ええ、お初にお目には掛かります。ええ、私今日からこちらにお世話になります蒲郡と申します。以後よろしく…

蒲郡 …。あの、蒲郡と申します。よろしくお願いします。

安岡 チツ。チツ。チツ。チツ。

蒲郡 あの…

安岡 シーッ！

蒲郡 は？ は？

安岡 時間がね、分からなくなるから。

蒲郡 はい？

安岡 チツ。チツ。チツ。チツ。

蒲郡 …。

権田原 そいつはね、時計なんですよ。

蒲郡 時計…(権田原に)あ、蒲郡と申します。よろしくお願いします。

権田原 バカヤロウ。(と胸のあたりを軽くたたく)

蒲郡 は？

権田原 (独り言で)…なんか違うな…バカヤロウ…(素振りする)(バカ、バカヤロウ…)

蒲郡 あの…

権田原 違うだろ。(と頭をはたく)…なんか違うなあ。違うだろ。(素振りを繰り返す)

蒲郡 …。

なにやら賭け事をしていたらしい水内と安岡のあいだで、喧嘩が始まる。

水内 このヤロウ！

権田原 わ、ちよつと待った。

騒ぎが看守に聞こえることを恐れて必死にとめる権田原。

水内 てめえ、黙ってりゃいい気になりやがって…！

蒲郡 あの、わたし蒲郡と申しまして…

権田原 いいから早く止める、バカ！

ようやく収まる喧嘩。皆、氣息奄々。

体力のない蒲郡ははね飛ばされて伸びている。

権田原 勘弁してくれよ…。看守に聞こえたらごつすんだ。

水内 だいたいこの野郎がイカサマしやがるからなあ…

権田原 わあ、ったった、待った待ったまった。

もはや喧嘩のための体力も、それを止める体力もない。

水内 それで…

ややあつて水内が口を開く。

水内 なにやったつて、あんた…

蒲郡 …。(息が上がつてまともに返事が出来ない)

水内 殺しか。ここにいるのは皆そうだ。

蒲郡 …いや…あの…

水内 ハツキリしろよ、ええ？

蒲郡 …(ようやく呼吸を整えて)がまごおりと…申します…

水内 そんなこたあ聞いてねえよ！

権田原 まあ、いいじゃないですか。無理に聞かなくたって。

水内 で、あんた、土産は？

蒲郡 は？

水内 土産は？

蒲郡 いや、あの。

水内 まさか、おまえこん中入つてくんにテブラつてことはねえよな。

蒲郡 いやその。

水内 おまえ来たときにもなんか持ってきたもんなあ。

権田原 ああ、あれは…

安岡 ビア！。

水内 そう、サントリーモルツ。こんな、こんなちっちゃなやつなあ。二本。

蒲郡 えっ、ビールを。

水内 えらい。どうやって持ちこんだと思つ。

蒲郡 …。

水内 三本全部、尻の穴ん中に入れて来たんだぞこいつは。ええ？ どうだ。

蒲郡 …それがそのええと、実は私、痔の氣がありまして、その、ちよつと、あまり大きなものは…

水内 誰がそんなこと聞いてんだ、タコ。(蒲郡の頭を殴る)

権田原 あんた、娯婆でなにやつてたんだ？

蒲郡 ええと、物を書いておりました。

水内 なんだ、小説家かおまえ。

蒲郡 イヤ、あの

権田原 小説家！ 小説家つていったらあれだと、えーと、ほら、源氏鶏太とか…森村桂とか…

水内 いつの時代のハナシしてんだ。

蒲郡 イヤ、あの…

権田原 じゃあ、えー、柴田錬三郎とか…：：：～

蒲郡 あのですね、

水内 つまりよ、刑務所つてところはな、とにかく刺激物はご法度なんだよ。読める本だつてそういうあたりもさわりもなんにもねえもんばかりよ。

蒲郡 なるほど。

権田原 テレビ駄目だろ。ラジオは聴けるけど番組の選択権はない。酒はもちろん、タバコも一日五本まで。そういうことよ。

水内 だからよ、こいつがモルツ持ち込んだ時はそりゃあもう一大イベントだったわけよ。あのモルツの味は一生忘れねえよ。

蒲郡 なるほど…

水内 あんた、ビールで何が好きだ？

蒲郡 は、ええ、まあ、ビア吟醸とか…穢三昧とか…

水内 なんだとオ？（もの凄い顔で睨みつける）

蒲郡 だからビア吟醸…あ、モルツ、好きです。モルツがいいですよ。

水内（苦悩の表情）そんなビールが出ているのか…。それはうまいのか？ 言え。どんな味がする？ え？ どんな味だ！

蒲郡 イヤ、ビールだから。

水内 なんでそいつを尻に入れてこないんだ！ バカ！

蒲郡 そんな無茶な。

水内 なにが無茶だ、バカ！（再び蒲郡の頭を殴る）

権田原 なあ、オレ、滅茶苦茶いいこと考えた。

水内 ああ？

権田原 土産がわりにさ、こいつにお話ししてもらおうぜ。

水内 お話しイ？

権田原 そう、ものすげえ刺激的なやつな。

水内 …（怖い顔をしている）

蒲郡（水内の顔を見て）イヤ、私、物書きといっても小説を書いていたわけじゃなく…

水内（さえぎって）そりゃいいなあ！

蒲郡 …。

権田原 な。

水内 いいよ！ オマエどっか違うと思ってたんだ俺は。…（蒲郡に）やれ。オマエもプロだろ。オレたちに刺激を与えてくれ。そしたらテプロで来たことは多めに見てやる。安岡！ オマエも聞きたいだろ！…ホラこんなに聞きたがってる！

蒲郡 イヤ、ですから、私はどちらかというところフィクションでなくて体験記とかそういうノンフィクション的な分野で…

水内 …（非常に怖い顔）

蒲郡 …（座り直して）えー、昔むかしあるところ…

蒲郡はそう始めて、そとと皆の様子を窺う。

権田原、水内、安岡は、息を呑んで聞いている。

蒲郡 ええ…旅の、僧侶がおりました…。（思いつきで話を作りながら話している）…ただ若いその僧侶は旅をしながら、世界で一番美しい女性を探しているのです…。

水内 坊さんが女探してんのか。

権田原 なんか変じゃねえか？

安岡 そ…そりよって、なに？

権田原 だから坊さんって言ってんだろ。

蒲郡 なぜ僧侶が女性を探しているかと言つと、えー、それは夢のお告げがあったからでした。ある夜の夢に、老人が出てきて、「三界に並ぶもの無き佳人を見出すべし」と命じたのです。

水内 ど、ど、どんな老人なんだ、そりゃ。

権田原　なんでそんな奴の言うことホイホイいきいちゃうわけ？
安岡　かじんで、なに？

水内　美人のことだ！　黙ってる！
蒲郡　その老人は、真っ白な髪に真っ白な長い髭、腰には二尺二寸の大剣を帯び、額には三日月の形をした向こう傷、それはそれは神々しい姿で、僧侶にはそれが神託のように思えたのでした。

権田原　なるほど、神のお告げってわけだ。（先手を打って安岡に）

水内　わかるか、神託だ。だから神サマの、神サマが…

安岡　うん、知ってるしってる。

水内　：

蒲郡　…世界一の美人を求め、僧侶は山を越え谷を越え、川を下り海を渡り、長く苦しい旅を続けました。やがて、ある城下町に入る道すがら、後ろから一人の少年が、僧侶に声をかけました。

蒲郡は話につまる。

権田原　なんだっていうんだ。その少年は！

蒲郡は必死で考えている。

水内　てめえ、もつたいぶるなよ！　はやくしろよ！

殺気立つ囚人たちに責められ慌てて蒲郡は話をつなぐ。

蒲郡　えー、少年は、えー、僧侶を呼び止めこう言いました。「こんにちは」…。

蒲郡はそっと囚人たちを窺う。みんな必死の形相で聞いている。

蒲郡　「出会った方の健康と幸せをお祈りしています」…。

我ながらベタな展開に蒲郡は観念して後ろを見る。
みんな真剣に聞いている

蒲郡　（ホツとして）僧侶は答えました。「私もです。それが私の職業ですから。私は僧侶です」。少年がいました。「えー、そうなんですかあ。困ったなあ。本職の人だったんですね。じゃあ、私も本職で対抗しましょう」少年は背負っていた袋からピンク色のヒヨコを取り出して言いました。「可愛いヒヨコはいかがですか。長生きします。大きくなりません。呼ぶと来ます。いかがでしょう」僧侶はいいました。「しかし私は旅の途中。世話をしやることもできません。せつかくですが…」少年は言いました。「そうですか残念です。ではこのヒヨコはわたしが食べてしましましょう」

権田原　なにい！　ちょっとまって！　買ってやれよ！　可愛いヒヨコだぞ！　呼ぶと来るんだぞ！　買ってやれって！　かわいそうじゃねえか！

蒲郡　…僧侶は言いました。「それではヒヨコがかわいそうだ。よろしい。私が買って、誰か世話してくれる人を捜すでしょう」…「僧侶は少年にお金を払ってピンク色のヒヨコを受け取りました。去ってゆく少年の後ろ姿に僧侶は「なんと呼べばいいのですか」と尋ねました。「あーん？」振り返った少年の顔は、小沢一郎そっくりでした。「なーんだってえ？」「あなたは呼べば来ると言った。なんと呼べばいいのです」「そーんなこと、知るけん」少年はノシノシ去って行きました…。

囚人たちは考え込んでいる。

水内 どういうことだよ…。

権田原 なんて呼べばいいんだ。

水内 そこが問題じゃないのか？

権田原 難しい問題だな。

蒲郡 えー、仕方ないので僧侶はいろいろに呼んでみました。しかしヒヨコは歩きません。ピーちゃん、ピヨちゃん、トットちゃん、ピンク、ピンキー、モモちゃん、トリ助、ミッシェル、ジーザス、マイケル、伸彦、佐助、カンディンスキー、桃色3号…

権田原 ヒヨちゃんだ！ ヒヨちゃんにしよう！ 歩け、ヒヨちゃん！

水内 やかましい！ 黙って聞け！

権田原 ヒヨちゃん…。

蒲郡 知る限りの名前と言う名前を呼び尽くし、やがて日も暮れ、僧侶は途方に暮れてしまいました。ヒヨコはただただ小首を傾げて、僧侶を見上げるばかりで一歩たりとも歩こうとしません。疲れはてた僧侶は路傍に腰をおろし、天を仰いで大きなため息を息を吐きました。「ヒヨコよ、おまえは一体なんという名前なのだ…！ 月だけが彼を見下ろしていました…。と、その時です。不意に道端の茂みの中で人影が動き、その影が小声で、誰かを呼び求めるように、こつ叫んだのです。「アブラクサス…アブラクサス…！」それは驚いたことに、綺麗な女の声でした。しかしそれよりも僧侶が驚いたのは、今までガンとして大地に足をふんばって動かなかったヒヨコが、その声に応えるように、トコトコと歩き始めたのです。

盛り上がる囚人たち。

水内 うおお、おもしろくなってきた…！

権田原 アブ…アブラ臭い？

蒲郡 僧侶は驚きのあまり声もなく、茂みから出てきたその人を見上げました。その人は若い女性で、アラビア風の、体に布を巻いたような服を着て、月の光のなかに立っていました。僧侶の体に電流が走りました。この人だ！ 私が探し求めていたのはこの女性に違いない！ それほどに、月の光の中で、彼女は美しかったです。

囚人たちは声を失って集中して聞いている。

蒲郡 僧侶は、はやる気持ちを必死に鎮め、女に聞きました。「どうしてあなたはそのヒヨコの名前を知っているのです」と。女はかなしげに首を振り、ただひとつの不思議なことを繰り返すばかりです。アブラクサス、と。女はどうやらそれ以外のことをしゃべれないようでした。僧侶は意を決して言いました。「あなたは世界一美しい女性だ。どうか私の妻となって私の国に来てもらいたいです。…」そうして、僧侶と女とヒヨコという奇妙な取りあわせの一行の旅が始まったのでした。

権田原 頑張れヒヨちゃん…。

水内 勝手に名前つけんなよ！

蒲郡 …そして十年の歳月が流れました。

権田原 ななな、なにイ！

水内 豪快に端折りやがったな…。

蒲郡 村に戻った僧侶と女は、幸せな毎日を送っていました。

権田原 ヒヨちゃん！ ヒヨちゃんはとうなったんだ！

蒲郡 ヒヨコも今では立派に鶏になって毎朝鶉の声を上げています。

権田原 大きくならないって言ったじゃないか！

蒲郡 そしてある日僧侶のもとに、王様からの使いがやってきました。使いの趣はこうでした。王様は世界一美しい女性を探している。ついではこの村で噂の高い美女を王宮に連れてくるように、と。僧侶は仕方無く妻を連れ

権田原 ヒヨちゃんは！

蒲郡 鶏も連れ、王宮に参内しました。ほどなく王様が姿をあらわし、二人に向かつていいました。「くるしゅうない。面をあげい。余はアブラクサス三世である」驚いた僧侶が顔を上げるより早く、鶏は一声鳴いて羽を広げ、あつというまに広間を飛び渡り、王様の肩に止まりました。

蒲郡もいつしか自分の話に乗ってきて、芝居気たっぶりに演じている。

蒲郡 …王様はいいました。「おお、やはりそうじゃ。姫！ そなたはわしのただ一人の娘じゃ！ この十年というもの、探し続けておったのじゃ」僧侶の目には、王様の顔はどうしてもあの日の少年が年老いた顔にしか見えませんでした。「たのむ。姫よ。わしのもとに帰ってきてくれ」しかし女は首を縦に振りません。僧侶は言いました。「王よ。姫は今では私の妻として睦まじくくらしています。どうかご勘弁を」王は無慈悲に言いました「そんなこた、知るけえ」僧侶は高い塔のてっぺんに幽閉されてしまいました。…王様はそれから毎日のように姫を説得しました。しかし姫はかなしげに首を横に振るばかりでした。そして、イラだつた王様は、とうとう、言うことを聞かない姫の首をはねってしまったのです。

囚人たち、息を呑んで聞いている。

蒲郡 王様は、姫の首の前に、ボーゼンとしていました。その時、死んだはずの姫の口がかすかに動いたような気が…。王様は目を疑いました。確かにその口はこう呟いたのです。「おとつさん…」王様はその日以来、王宮から姿を消しました。噂では商人にみをやつしてあてもなく旅をしているということ。…そして、僧侶は高い塔のてっぺんに閉じこめられたまま、来る日も来る日も、たつたひとつのことを考え続けました。あの姫は、本当に世界一美しかったのだろうか…。自分は何命を果たすことができたのだろうか…。そして百年がたち、今でも朝がくると、必ずあの鶉の鶉の音が、主のいない宮殿に響きわたるのでした…。

一同沈黙している。

蒲郡、即興話の出来に満足げである。

権田原 それで、結局その僧侶はどうなったんだ…

蒲郡 ええと、ですから今でもその塔のてっぺんに閉じこめられたまま…

権田原 なにー！

蒲郡 イヤそついうお話しです。あくまでもお話し…

権田原 じゃ王様は？

蒲郡 えつ、王様。おつさまは「えー、実の娘であるところのお姫様を、自分の手で殺してしまつたわけだから…えー

権田原 はつきりしろ！ テメエ！

蒲郡 いやあの、お話しですから…

権田原 そこんとはつきりしないとテメエ、ブチ殺すぞ…。

水内 おい。

権田原 とめるな！

水内 とめない。

蒲郡 …とめましようよ。

水内 蒲郡って言ったっけ、あんた。

蒲郡 はい。

水内 …ここはひでえとこだ。あんただってじきに分かる。俺たちは、長いんだ。だからこのひどさは俺たちが一番よく知ってる。…あいつを見な。

蒲郡 …。

水内 あいつ（安岡）はな、薬でああなった。

蒲郡 薬っていうと…

水内 麻薬じゃない。ああなったのはここに来てからだ。新しい抗ガン剤の投与実験でああなった。

権田原 実験囚つてやつさ。

蒲郡 実験…そりゃ、人体実験じゃないですか。

水内 信じられないか？ でも事実だ。ここじゃ本人の承諾があれば出来るんだ。

蒲郡 なんでそんな承諾なんか…

水内 看守の受けがよくなるんだ。あいつ、苛められててなあ、怖かつたんだ。少しでも気に入られたかつたんだろ？ 言われるままに承諾書にサインしちまつた。もともと気の弱いやつでな。まあ、だからいじめられてたんだろ？ …それで結果がこのザマだよ。安岡。…止まつてるぞ。

安岡 …。

権田原 ネジ巻いてやるよ。

権田原、ネジを巻くマネをしてやる。

安岡 チツ。チツ。チツ。

水内 今何時だ？ ヤス。

安岡 十時二十五分。

権田原 ボチボチいこうか。

立ち上がる囚人たち。

水内 俺たちは今夜こつから出ていく。時間がないんだ。

権田原 ここからは俺たちだけでいくから。

水内 あんたとはここでバイバイだ。

蒲郡 な、なんで…

水内 分かつてるだろ。おまえには分かつてるはずだ。

ゆっくりと去っていく囚人たち。

蒲郡 ちよつと待てよ！…どこいくんだよ！

叫ぶ蒲郡に水内が振り返る。

水内 …王様に会いに行くんだ。じゃあな。

囚人たち退場。

蒲郡

どこに行くっていうんだ、バカヤロウ…おまえらのいくところなんか、どこにもあるもんか…バカ野郎…どこにも…行くところなんてありゃしないんだぞ…大バカ野郎…！

つづくまる蒲郡。
舞台は暗くなる。

ACT・03 精神科医1・蒲郡編

精神科医1登場。

精神科医1 ……それで？

蒲郡 それだけです。

精神科医1 他の人たちは…一緒に脱獄した仲間たちはどこへ行ってしまっただけでしょうね？

蒲郡 わかりません。

精神科医1 目が覚める前には必ず、あなたひとりが取り残されるんですね。

蒲郡 そうです。

精神科医1 いつも？

蒲郡 いつも。

精神科医1 なぜだと思いますか？

蒲郡 ……

精神科医1 あなたはその理由を分かっているでしょう？

蒲郡 ……（言い淀む）

精神科医1 正直に、思った通りに。

蒲郡 私は…彼らの…仲間ではないから…。

精神科医1 同じ刑務所にいるのに？

蒲郡 そうじゃない、違うんだ…私は…

精神科医1 あなたは実際には法律を犯していない、取材のために体験入所している、志願囚に過ぎないから…そうですね？

蒲郡 私は…彼らが見たものが見たい。みんな、見たんだ。みんな同じものを見た。

精神科医1 （限りなく優しく、しかし目は爛々と輝いている）同じものって？

蒲郡 ……（沈黙に落ちていく）

精神科医1 （その様子を見て話題を換えるように）…どうしてそれが見たいの？

蒲郡 書くためです。決まってるでしょう。僕は書くためだけに生きてるんです。

精神科医1 どんな本を書くの？

蒲郡 犯罪者の深層心理です。そこには暗く淀んだ歴史の老廃物があるんです。血を流すことで歴史を築き上げてきた人類の共通の故郷がそこにあるんです。人間ともつとも親しい、もつとも古い友人がそこに住んでいるんです。僕はそれを書きたい。だからこうして刑務所の中で、犯罪者と共に過ごし、他の囚人と同じようにこうして精神分析も受け、彼らと同じように暮らしているんです。なんでもしますよ。僕はね、書くためなら、僕はなんでもするんです。

精神科医1 面白い本になりそうね。私も読みたいわ。タイトルは決まっているの？

蒲郡 ……それはね、決まってるんですがね、まだ、言えません。

精神科医1 そう、残念だね。…じゃあ、最後の検査です。

精神科医1は、手にしていたファイル状の冊子を開いて掲げる。

精神科医1 これがなにに見えますか？

蒲郡 ……雲。

精神科医1 （違うページを開いて）これは？

蒲郡 銃…そつ、猟銃に、見えます。
精神科医1 これは？

蒲郡 …。鳥。

精神科医1 (違うページ)これ。

蒲郡 鳥…。黒い…

精神科医1 …(黙ってページをめくる)

蒲郡 鳥…(急に興奮して)鳥、鳥だよ鳥！ そんなインクのシミなんかクソくらえだ！

精神科医1 (静かに冊子を閉じる)…今日はこれまでにしましょう。戻って下さい。

蒲郡 先生。僕が志願囚だったこと他の囚人に言わないで下さいね。

精神科医1 もちろんよ。

蒲郡は安心したように独房のほうに戻りかけ、振り向く。

蒲郡 (囁くように) いるんですよ、先生！

精神科医1 …。

蒲郡 あいつはそこにいるんです。比喻や象徴なんかじゃない、今先生と私がこうして
いるこの瞬間に、この同じ空間に、あいつはいるんです。

蒲郡、独房へ戻る。

物思いに沈む精神科医1の背後にひとりの囚人(権田原)が登場する。

権田原 …。

精神科医1 …。(気づかない)

権田原 ご苦勞様、先生。

精神科医1 …！

権田原 どうですかね、あいつ？

精神科医1 …(気を取り直して)あまりいいとは言えませんね。

権田原 そろそろ戻してもらえると助かるんですがねえ…

精神科医1 …(黙って権田原の顔を見る)あなたも出ていたわよ。

権田原 …？

精神科医1 あなたも、安岡さんや水内さんもみんな。

権田原 なんの話ですか？

精神科医1 人格は大幅に操作されていたけど、それなりに興味深い内容でした。

権田原 夢の中でも臭い飯かよ…。

精神科医1 夢というより妄想。自分が本当は何の犯罪も犯しておらず、本を書くための取材としてここに入所しているという、一種の現実逃避。

権田原 五人も殺してるんですよ、アイツ。

精神科医1 …そうね。

権田原 …。

精神科医1 権田原さん。

権田原 はい。

精神科医1 房内になにか…鳥を…黒い鳥を連想させるようなものはありませんか。

権田原 …鳥？…いいや。

精神科医1 そつ。

権田原退場。

立ちつくす精神科医1。

刑務所内は急激に夜になってゆく。

ACT・04 改革計画

刑務所に朝がくる。
ジリリリリ…とベルが鳴り響くなか、囚人たちは独房より起き出し、作業開始。
作業終了、休憩の時間となる。

権田原 なあ…。おかしいと思わねえか。

安岡 なにがですか。

権田原 今日、土曜日だろ。

安岡 ああ、そうだった。

権田原 てことは今日はハンドンド。

安岡 だから今日はこれで終わりでしょ？ なにがおかしいの。

権田原 なんて土曜がハンドンなんだよ。

安岡 だって…そう決まってるでしょ。

権田原 おかしいよ。よく考えてみるよ。

安岡 だって決まりでは、休業日は日曜、祝日、土曜の午後、官庁の休む土曜日って決まってるじゃないですか。

権田原 今は官公庁だって、土曜は毎週休むじゃないか。

安岡 あ。そうか。

権田原 そうだろ。世の中の流れは週休二日に向かっているんだよ。それなのになんでおしたちだけいつまでも土曜はハンドンなんだろう。

安岡 そついわれりゃ

蒲郡 また始まったよ。

権田原 おかしいことはおかしいんだよ。おまえ何も感じないのかよ。

蒲郡 感心してんだよ。よくそう毎日毎日ロクでもない文句のネタ考えつくもんだ。

権田原 ロクでもなくねえだろ。おまえだって土曜休みりゃ嬉しいだろ。

蒲郡 別に。土曜が休みになったって、かわりにすることあるわけじゃない…

権田原 いろいろあるだろ。本読むとか、一週間の出来事をノートに書くとか…

蒲郡 出来事ねえ。今日は朝、起きました。顔を洗いました。昼にはタクアンふた切れと野菜のテンプラが出ました…ははは…全員書いている内容が同じになっちゃうな。

権田原 (イライラして) だからそのテンプラの味とかを書けば、それぞれ個性がでるだろ！

蒲郡 味イ？ 今日のテンプラの味だってよ、どうだった？

安岡 まあ、不味かったですね。

蒲郡 水内のおっさんは。

水内 まずかったな。

蒲郡 なあんだ、みんな同じだ。

権田原 味が同じなら、テンプラについての思い出だっていいんだよ。それならそれぞれあるだろ！

安岡 でもあの野菜のテンプラは一日おきにでてくるからなあ。そうそう都合よく毎回違う思い出がありますかね。

権田原 だからあ…！

蒲郡 テンプラと言えはさ、オレよ、テンプラ使って一本撮ったことあったよ。

権田原 一本ってなんだ？ ビデオか。

蒲郡 そう、エロビデオの台本書いてたんだよ。駆け出しの頃な。

安岡 それと天プラとどういう関係が…

蒲郡 要するにホラ、女体盛りってヤツよ。女の体に喰いもん盛りつけて、男が喰うの。権田原 それのどこが面白いんだ…

蒲郡 そりゃ最後はヤルんだよ、だけどホラ、ただヤルだけじゃ身も蓋もねえから、そーゆー趣向をこらすわけよ。ところが女の体へのつける喰いもんが足りない、スツッフ全員でその辺走り回ってたまたま買ってきたのがテンプラだったわけよ。テンプラ一万円分。結局もう全部テンプラ。…あれなんてタイトルだっけかなあ…。確か、女体…

安岡 あ…、それ、オレ見たことあるかも知れない…。

権田原 なるほど。まあ、そういうよつにいろいろ思い出があるわけだ。な？ だから土曜日は…

蒲郡 女体…女体盛りあわせ…違うなあ…確か頭に女体がついたんだよ。

安岡 あれ、俺の見たのなんてったかなあ。「女体…

蒲郡 そう、女体…だよ、…ニヨタイ…

安岡 女体…、えー、女体

権田原 女体女体ってうるせえよ！ だから！

安岡 女体盛り合わせ！ 違うか…

権田原 女体コロモ揚げ…いや…、

安岡 思い出した！「女体グルメ・アブラのってます」！

蒲郡 それは絶対違う。

水内 「女体てんこ盛り・みんな揚げちゃう」だ。

安岡 あっ！

蒲郡 それだ！

権田原 なんて知ってたんだ！ 何がみんなアゲちゃうだ…！ そんなことはどうでもいいんだよ！ そっじゃないんだ！ もっと真面目に考えろよ！

蒲郡 いいじゃねえかこうやって盛り上がってたんだから。

権田原 だから俺のいいたいのは…。

賄い婦登場。

賄い婦 ご苦労さん。

安岡 わ、びつくりした。

賄い婦 あんたたち、聞いたかい。

権田原 なんだ、オバさんか。

賄い婦 「なんだオバさんか」？ 「なんだ」はないだろ、「なんだ」は。

権田原 なんだで十分だ。

安岡 オバちゃん、また油売ってんの？ 今日の晩飯なに？

賄い婦 んー、野菜のテンプラだよ。

安岡 きかなきゃよかった。

水内 なんて、昼夜同じなんだ。

賄い婦 なんだいなんだい無愛想だねえ。人がせっかくビッグニュースを持ってきてあげたっていうのにさあ。

水内 なんだい、ビッグニュースって。

賄い婦 そうそう、それだよ、あんたたち聞いたかい聞いたかい。

権田原 聞かないよ。

賄い婦 …。聞かないかい、そうかい。ふうん、聞かないのかい。ふうん…

賄い婦はスネてたち去ろつとする。

権田原 ちよつと待て。…待てつてば。

賄い婦 おや、なーんだ権田原さんか。

権田原 なんじゃない。…なんだよ。

賄い婦 「なんじゃない、なんだよ」？…「なんじゃない、なんだよ」…日本語はむつかしいねえ…。

権田原 根にもつババアだなあ…トボケるなよ。なにを聞いたつて？

賄い婦 聞きたいかい？

権田原 聞きたいです。

賄い婦 来るんだよ来るんだよ。

蒲郡 何がくるんだよ。

賄い婦 ア、イ、ド、ル。

全員 はあー？

賄い婦 アイドルだよ。アイドルが来るんだよ。うれしい？ うれしいかい？

権田原 わけがわからん。

賄い婦 ほら、こんど文化祭があるだろ、年に一度の。その時に、なんとアイドルが一日所長になるんだよ。それでね、今日その挨拶にアイドルがくるんだつてさ。

蒲郡 なんてアイドルだよ？

賄い婦 それがねそれがね（うれしそう）栗本、さ、や、かってえんだよ。

安岡 知らねえなあ。

水内 俺たち世間から隔離されてるからな。

権田原 おばさん何がうれしいんだ？ ファンなのか？

賄い婦 顔も知らないもん、ファンなわけないだろつ。

安岡 あんまり売れてないんじゃないですか。

賄い婦 それがさ、あたしと同じ名前なんだよオ。

一同 なに…イ。

賄い婦 なにイつてなにかね。

権田原 だつておばさん松田つていうんじゃないかっつたつて。

賄い婦 だからなんだい。松田沙也華つていうんだあたしや。

権田原 …どうする。

安岡 どうしようもないでしょ。

賄い婦 なんか文句あげだねえ、あんたたちは。ふん。

賄い婦、掃除を続ける。

権田原 けつ、一日所長だよ。

安岡 チャンスですよ。

蒲郡 なにが。

安岡 一日所長だつて、所長だろ。俺たちの生活改善要求を突きつけるんだよ。

蒲郡 バカか。そんなヤツに権限があるわけねえだろ。
 安岡 少なくともそういう設定を認めさせるんだ。そして、要求を聞かないときは…
 権田原 どうするっていうんだ。

一日所長、登場。

なぜか「無罪」と大書されたタスキをかけている。

小夜夏 あれー、出口がわからなくなっちゃったあ…。あ、皆さん今日は、今度一日所長でお世話になる栗本小夜夏でえす。

権田原 あれが、アイドルか…？

水内 なんだ、あの「無罪」ってのは…。

権田原 なんかつげえ馬鹿にしてないか？

安岡 所長。聞いて欲しいことがあるんですが。

小夜夏 え、なんですかあ。

安岡 土曜日をね、休みにしてくれませんかね。

小夜夏 そんなこと言われても…こまっちゃったなあ。

安岡 してくれないともっと困ったことになりますよ…。

小夜夏 えーと、じゃあ、そのかわり、新曲を唄います…。くぶっ。

安岡、いきなり小夜夏に当て身をくらわせる。

権田原 おい！

安岡 ドア締める、ドア！

安岡の気迫に押されてドアをしめる。

小夜夏 やめて、ちよっとお。

安岡 あんたは人質だ。

水内 無茶苦茶するなあ。

権田原 冗談じゃねえ、おれはおりぞ。

鳴り響くサイレンの音に、一同は青ざめた顔を見合わせる。

権田原 どうすんだよ！

賄い婦 同じ穴の貉ツ子ちゃん！

安岡 (無視) こいつを人質にして、ヤツらに要求を突きつける。革命だよ革命。

権田原 バカなこというなよ！

安岡 おれはなあ、テロリストなんだよ。ここに入ったのも、電気会社の支局を爆破したからだ。電気会社のやつらは企業の利益のために原発をたてまくってる。だから制裁を下した。今度はこちらだ。刑務所を理想国家にするんだ。

権田原 …正気か、おまえ！

安岡 俺は機会を狙ってたんだ。

権田原 そんなデタラメな計画に俺たちを巻き添えにする気かッ？

蒲郡 おい、オマエ、クミコじゃねえか。ええ？

小夜夏 えっ！

蒲郡 俺だよ、蒲郡。覚えてないか？

小夜夏 あんたなんか知らないわよ。

蒲郡 あ、やっぱりそうだ。オマエ、五年前にビデオとったろ？ ほら、十条のラブホテルで。

小夜夏 (ギクリ) なに言ってるのよ、あんた頭おかしいんじゃないの？

水内 するとこれがあの…

蒲郡 そう、女体舟盛りの…

権田原 竜田揚げだろ！

小夜夏 違っつてば、てんこ盛り！

一同 …。

小夜夏 あっ。

賄い婦 語るに落ちたっ子ちゃん。

威嚇射撃の音がする。

数人が外の様子を見る。

水内 どうだよ、表の様子は。

蒲郡 すっかり包囲されてるみてえだな。

権田原 ああああ、なんでこんなことになっちゃまったんだろっつなあ。

安岡 とにかく、いけるとこまでいこうぜ。こうなったらさ。

権田原 俺はただ刑務所をもうほんの少しだけ快適にしたいだけなんだよ！

安岡 とりあえず人質がいるからよ。とにかく武器だよ。看守の持つてる銃とかを取り上げるんだ。それで次に看守どもを檻なんかに入れちまおう。

賄い婦 そんな、ここから脱獄するのかい？ 脱獄するのかい？

権田原 別に俺は出たいなんて言ってるねえんだよ！ ただ…ただ、風呂の時間をあと五分だけ長くしてもらったり、絵ががきは色つきでも可、とか…そういう風に少しづつ、少しずつ変えていきたくっただけなんだよ…！

安岡 俺もここから出ようなんて思っっちゃいないさ。だってどこに行こうと俺たちは囚人なんだからさ。俺たちのいるところはどこだって鑑獄なんだよ。

権田原 だったらなんで…

安岡 だからさ、ここを俺たちの居場所にするんだよ。俺たちが自主的にここを管理するんだ。俺たちは囚人だ。だからここに囚人だけの国を作るんだよ。

権田原 きりきりじんかオマエは！

安岡 そうだよ！ おれはきりきりじんなんだよ！…きりきりじんてなんだよ？

権田原 知るか！ とにかく俺は、俺はなあ…

銃声が響き、権田原は額を撃ち抜かれて倒れる。

蒲郡 (外に) 降参って言ってるだろうが！ てめえらそれでも人間か！

水内 ばか、伏せろ！

連発する銃声。蒲郡、水内、倒れる。

安岡 上等じゃねえか…

安岡、小夜夏を引つたてて窓の正面に立つ。

安岡 やい、権力の手先ども、撃てるもんなら撃ってみろ！

小夜夏 撃たないでくださあい。あたしは関係ありません。

安岡 はっはっは。おまえらに一日所長が撃てるか。撃てねえだろ。臆病ものの腐れ役人が！ ざまあみやがれ！

銃声は沈黙している。

安岡 …… 唄え。

小夜夏 え？

安岡 ここで新曲をうたえ。やつらに聞かせてやれ。

小夜夏 でもオ。

安岡 いいから唄え！

小夜夏 …… く、栗本小夜夏、新曲を唄いまあす…

銃声。小夜夏倒れる。

小夜夏の体を貫いた銃弾が安岡の体にくい込む。

安岡 …… やりやがったな…。

よろめく安岡。

安岡 きりきりじんって…… なんだーッ！

銃声。安岡倒れる。

沈黙。

賄い婦 (伏せていた顔を上げ、あたりを見回す)…… 死体でんこ盛りになってしまった…。

暗転。

ACT・05 精神科医2・権田原＋安岡編

権田原と安岡が、並んで体操している。
精神科医2、後方で大学ノートのようなものをめくって読んでいる。

精神科医2 (ノートのようなものから目を上げて) それで…?

権田原 それだけですよ。

精神科医2 この後、最後はどうなるの?

安岡 別に…。最初から最後までありませんよ。もともと僕らのバカはなしから出来た話なんだから。

精神科医2 面白い話ね。

安岡 そうですか。でも許可されなかった。

精神科医2 そりゃそつでしょう。もともと許可されるとも思っていないでしょう?

安岡 まあね。

精神科医2 で、どうするの? 別のだし物を考える?

安岡 さあ…。

精神科医2 これだけのものを考え出せるんだから、まだ、フェスティバルには間があるし、今からでも違うお芝居を考えたらどうかしら?

安岡 カチカチ山でもやれっていうんですか。

精神科医2 機嫌が悪いのね、安岡さん。

権田原 先生。

精神科医2 なに?

権田原 胸のボタンがとれかかっていますよ。

精神科医2 は反応しない。黙って権田原を見ている。

権田原 信用しないんですか。囚人の言うことなんか信用できませんか。

精神科医2 はやはり動かない。胸元を見ようとせず、権田原を見ている。

権田原 …嘘ですよ。ボタンなんかとれてません。

安岡 先生、ボタンがとれた時、どうします?

精神科医2 新しいのをつけるわ。

権田原 そつですよ。誰だつてそつです。でもね、先生、僕らは違う。

精神科医2 …。

安岡 この囚人服、前はボタンがあったんですよ。知っていました?

精神科医2 いいえ。

権田原 中国人が来たんですよ。前にね。何だか気味の悪い奴でねえ。三人殺したとかいう話だったなあ。

安岡 その中国人、えらく看守と折りあいが悪くてね。事あるごとに反抗してたんです。看守も意地になってイビってたんだけど、ある時一番いびがみあった看守がね、ちよつとしたことでその男を懲罰房に入れようとした。まあ、よくあるいいがかりでね。中国人はものもいわずにいきなり自分の服のボタンを引きちぎつてね、こつ、指に握りこんで、…ビシッ…!

権田原 その看守、左目を失明しちゃったんですよ。「指弾」ていつんだそうです。すごい技ですよ。十円玉ひとつあればね、親指でパチン！…人一人殺せる。百発百中だそうですね。…何の話でしたっけ？

精神科医2 ボタンがとれたとき、囚人はどうするか、でしょう。

権田原 あそうそう。まあ、そんな事件があったもんだから今はボタンなしですけどね、前はあった。で、これがよくとれるんですよ。そつするとな、まず「紛失届」を書かされるんです。分かります？ ボタン一個とれて「紛失届」ですよ。笑っちゃうでしょ。そんなの面倒ですよ。でも届けを書かずにほっといて看守に見つかるとね、今度は即、懲罰ですよ。まあ今はボタンなしですからねえ。下らな規則がひとつ減ったわけだ。

精神科医2 で、あなたは何が言いたいのかしら。

権田原 別にいいことなんかありませんよ。しいて言えば、中国人おそるべし…つてここかな。

精神科医2 これはどうするの？ お芝居は中止？

安岡 どうでもいいじゃないですか。もともと先生のアイデアなんですよ？ そういうの聞いたことありますよ。精神科の医者がね、患者に芝居させてね、その様子を観察して精神状態を分析するっていう…

精神科医2 確かにそういう療法はあるけど…でもこれはあなたがたが持つてる「所内生活の心得」にも書かれていることなのよ。

権田原 知ってますよ。

安岡 僕らあれのこと「生徒手帳」って言ってんですけどね。その生徒手帳の第四章…権田原 「第四章、教育行事。一、教育行事（クラブ活動およびリクリエーションなど）は、とかく単調になりがちな所内生活にうるおいを持たせ、心を爽快にして気分転換をはかり、生活に明るいうリズムをつくるとともに、心身の健康の増進をはかるために行うものですから、積極的に参加し、生活目標を実現するように努めてください。」「よく覚えてるでしょ。」「二、年間の教育行事として宗教・情操・道徳・文化・職業・時事・産業・経済などについての講話会・音楽会・映画会・演芸会…」「ここですね、ポイントは、「演芸会などを行います。またこの他希望者だけが参加する彼岸会・盆供養・命日会・各派別宗教の集まりなどがあります。」「以下略。

安岡 その演芸会ってどこに引っ掛けて、囚人に芝居作らせようなんて、先生もなかなかやりますね。あの所長がよく許可したもんだ。

権田原 どうですか、僕らの書いた芝居は？ カウンセリングの参考になりました？

精神科医2 ええ、とても。

権田原 そりゃよかった。

精神科医2 特に、女の子を人質にとるところがね。あそこは誰が考えたの。

安岡 僕ですよ。

精神科医2 安岡さんはテロリストの役なのね。

安岡 そう。地でできますから。

精神科医2 地でね。でもあなたがこつして刑務所にいるのは、電力会社を爆破したからじゃないでしょう？

安岡 先生、何言ってるんですか。

精神科医 2 確かにあなたの仕掛けた爆弾で、電気会社に勤めてる小倉さんっていう営業部長が一人死んだ。でもあなたが逮捕されたのは別件だったはず…

安岡 (動きがとまる) 何言ってるんだ! でたらめはやめてくれ!

精神科医 2 あなたは忘れてるのよ。それを思い出させるのも私達の役目のひとつなの。

安岡 …。

精神科医 2 あなたは爆破事件の後で、偶然知り会った一人暮らしの女性の所に潜伏していた…その女性の名は小山則子…

権田原 もういいでしょう? 今日はこれから面会があるんですよ。面会は週に一度だけですからね。

精神科医 2 そうね。今日は終わりにしましょうか。

精神科医 2 は踵を返して、ふと振り返る。

精神科医 2 そうそう安岡さん、あなたにも面会の方が見えてるの。

安岡 (相手にしない) まさか。先生が冗談言っの初めて聞きましたよ。

精神科医 2 …。

安岡 (精神科医を見る) 俺に?

精神科医 2 初めてね。あなたがここに来て。

安岡 そんな馬鹿な。

精神科医 2 女の方よ。若い…。家族の方…ではないようね。

権田原 余計なお世話でしょう。誰が面会のごようとおんたには関係ない…

安岡 …則子か。そうでしょ先生。

精神科医 2 …。

安岡 あんたが呼んだんだな…。

安岡は歯をくいしばって精神科医 2 を睨み、精神科医 2 は患者を観察する医者目線で安岡を見返す。

シリリリ…とお馴染みのベルが鳴る。

精神科医 2 それじゃ。お疲れさま。

リンリン、と短いベルが鳴る
同時に独房エリアに小山則子が登場する。

ACT・06 面会

面会所。

則子 あ。

安岡 ……久しぶりだな。

則子 安岡さん。久しぶり。

安岡 何しに来た？

則子 やっぱりそう言われちゃった。そう言われるなあって思ってたんだ。

安岡 ……。

則子 お土産もってきたの。

安岡 差し入れてっていうんだよ。

則子 あ。差し入れ。差し入れか。あたし、慣れてないから。

安岡 そうだろうよ。

則子 慣れてたらおかしいか。

安岡 なに持ってきたんだ？

則子 なに？

安岡 差し入れは何持ってきたんだ。

則子 ハンバーガー。

安岡 なに？

則子 ハンバーガー。駄目かな？

安岡 駄目じゃない。

則子 安岡さん、好きだったから。

安岡 そうだな。ずっと食べてないよ。ずうっと…

則子 あのね、ピリ辛・北京ダック・ブロードバンド・バーガー…

安岡 そんなのが出てんのか…！

則子 作ってみたの。

安岡 ……。

則子 我ながら、作ってみたの。

安岡 ……。(ただ頷く)

則子 安岡さんは毎日何してるの？

安岡 別に。毎日、起きて、働いて、食べて、寝るだけだよ。

則子 わあ。

安岡 なんだ。

則子 私と同じ。

安岡 そうか。……まだあそこに住んでるのか？

則子 そうだよ。安岡さんの荷物は警察が持っていていっちゃったけど。

安岡 だろうな。

則子 でもね、いつも、安岡さんが帰ってくるような気がして。

安岡 ……。

則子 安岡さんは、いつも、ひとりで出かけてたでしょ。日帰りだったり、三日間だったり、長いときには一週間だったり…

安岡 ……。

則子 安岡さんはどこに行ってたのかな。いつも、安岡さんが帰ってくると、海のお
 いがしたよ。どこに、行ってたのかな。
 安岡 ああ、そうだな。…あの頃は、…いつも…

回想。

則子の部屋。

安岡が入ってくる。

安岡 ただいま。

***** (回想・ボディペイント)

安岡 (くるしそう) 俺は知らなかったんだよ。おまえが、あのとき死んだ小倉って男
 の愛人だったなんて…

則子 あいじんって言葉好きじゃないな。

安岡 かっこつけんじゃねえ！ おまえだって…それ知ってたろ…！ あのアパートで
 暮らしてたときに…それを知ってて、平気な顔で暮らしてたじゃねえか…！

則子 あ、やっぱり忘れてるんだ。

安岡 俺はあやまらねえぞ。俺は正しいことをしたんだ。電力会社のやつらは絶対に…

則子 …安岡さん。思い出して。

安岡 うるさい！

則子 でも安岡さん、思い出して。あなたが私を殺したの。だからあなたはここにいる
 の。思い出して。私のこと忘れないで。お願いしますね。

リリリリ…とベルが鳴り、後ろの囚人たちは面会相手に別れを告げ手を振っている。

安岡は膝から崩れ落ちる。

則子は挨拶をして退場してゆく。

ベルの音だけが鳴っている。

囚人たちはそのまま自分の場所に座り込む。

ACT・07 精神科医たち

囚人たちが座り込んでいる。

囚人たちから見えない別の場所精神科医2、3が立っている。

精神科医たちからは囚人たちが見えているようだ。

囚人たちは、虚脱した安岡の世話などをしている。

精神科医3 (囚人たちの様子を見ながら) …少し荒っぽくないですか？

精神科医2 必要な治療です。自分のしたことを忘れ記憶をねじ曲げ過去を塗り替える、苦しみから逃れるためのその繰り返し。果てに、しだいに自分が誰であるかも曖昧になってしまふ。そうなれば引き返してくることは困難です。

精神科医3 でも…本人にとってはそのほうが楽なんじゃ…

精神科医2 精神の安楽死を黙認するわけにはいきません。少なくとも、それを決めるのは私たちではない。

精神科医3 精神の…安楽死…

精神科医2 …彼らはみなその断崖に立つ。そして一様に虚空に身を躍らせようとす。無限に遠い空の彼方へと脱出を試みる。

精神科医1登場。

精神科医1 その先に待っているものは自由ではなく虚無だ。幾重に巡らされた囲みを破り、どのように暗い闇をくぐり抜けても、彼らは決して自由になることはできない…

精神科医3 …。

精神科医2 なかなかいい文章ね。

精神科医1 蒲郡風太が獄中で書いたものです。

精神科医2 権田原さんたちが頼りにしていたのも頷けるわ。

精神科医1 フェスティバル用のお芝居の台本を書いて欲しかったんでしょね。でも…

精神科医2 どうやら間に合いそうもありませんね。…安岡さんはどう？

精神科医1 だいぶ落ち着きました。

精神科医2 これが、そう？

安岡が則子の背中に描いた絵の写しが精神科医の手元にある。

精神科医3 安岡さんの描いた絵ですか？

精神科医2 …。(その紙をうに広げて見せる) なにに見える？

精神科医3 …。

精神科医2 そう。

精神科医3 (紙を手取る) 鳥、ですか…

精神科医1 …なにかありますね、やはり。

ACT・08 集団療法

精神科医たち高いところに陣どっている。
囚人たち全員、中庭に集合して正座している。

精神科医2 皆さん、聞いてください。今日は、特別に所長の許可を得てこうして皆さんに集まっていたできました。ご承知の通り、私達は常日頃、皆さんの精神の健康のためのカウンセリングを行っています。それは通常、個人、あるいは少数のグループの単位で実践されているわけですが、今日は新しい試みとして、このような大所帯で、いわゆる集団カウンセリングというものを試してみたいと思います。

囚人たちは神妙に聞いている。

精神科医2 それではこの集団カウンセリングの目的を。

精神科医3 この集団カウンセリングの目的は、皆さんの現在の精神状態を分析し、今後のよりよい所内生活の指針とするための参考とするための手助けとするための一助として活用するための前衛的で革新的で実験的で薄利多売的な…(混乱しきっている)

精神科医2 もう結構。では集団カウンセリングの具体的方法論を。

精神科医1 エー囚人の皆さんには、これからわれわれが指示する状況に、実際に自分が置かれたら、自分たちがどういう行動をとるか、ということをしミュレーションしていただきます。その反応によって、皆さんの心理的現在、いわば精神面での立ち位置、とでもいっうんでしょうか、メンタルなファクターを理解する資料にしたいと考えます。

精神科医2 ではさっそくはじめさせていただきます。どうか皆さん、緊張せずに、肩の力を抜いて、自分の心の声に素直になって下さい…。

精神科医3 恐れることはなにもありません。

精神科医1 内なる声の赴くままに…。

精神科医2 オープン・ユア・マインド…。

囚人たちは目を閉じて、一種の催眠状態に入っていく。

精神科医3 なお、これは純然たる医療行為であり特定の宗教とは関係ありません。

精神科医2 余計なことは言わなくてよろしい。

精神科医3 失礼いたしました。

精神科医2 あなたがたはいま、海辺にいます…。

囚人たちは立ち上がって、海の匂いを嗅ぐ。

精神科医2 海は風ぎ、空は晴れています。いい気持ちです…。海からの風が汗ばんだ体を心地よくなぶる…。

囚人たちは気持ちよさそつに深呼吸する。

精神科医1 足元には濡れた、熱い砂…。

精神科医2 そして色とりどりの貝…。

精神科医 3 あ、目で足を切ってしまった。

囚人たちは足を押さえて痛がる。

精神科医 3 真っ赤な血がドクドク流れ出して、あたり一面は、もう血の海…あ痛っ

(精神科医 2 がはたく)。

精神科医 2 …。

囚人たちは血の海でもがき苦しんでいる。

精神科医 3 …。入ってますネ。

精神科医 2 …。(どうすんのよ、という視線)

精神科医 1 しかし、傷は浅かった…!

精神科医 2 …。(エライ! という視線)

囚人たち、立ち直る。

精神科医 1 血の海も引き、今は、夏。(強引な展開)

精神科医 2 爽やかな風、輝く太陽。

精神科医 1 治った足。

精神科医 2 さあ、あなたがたは海の男。海の男が海でどうする。

囚人たちは地引き網を引く。

精神科医 2 気持ちをひとつにして地引き網を引く。壮快です。

囚人たちは網を引き続ける。

精神科医 2 (突然) あ、突然大きな波が。

囚人たちは驚き慌てる。

精神科医 2 大丈夫、冷静に対処しましょう。波に身を任せるのです。

囚人たちは波に合わせてウェーブをする。

精神科医 2 波は引いていきました。皆無事です。海はあなたがたの味方なのです。

精神科医 1 そして今は、夏。

囚人たち、額の汗を拭う。再び網を引く。

精神科医 2 …。大漁です。いろいろな魚がいますね。鰯。鯖。ぶり…(安い魚ばかり)

精神科医 1 鯛。はまち。鮪…。(高い魚ばかり)

精神科医 2 (対抗意識を燃やす) さより。こはだ。…ししゃも…

精神科医 1 伊勢エビ、ウニ、大トロ…

精神科医 2 タコ、えー、イカ…

精神科医 1 金目鯛。鰹。イクラ。

精神科医 2 た、たまご…

いつの間にか囚人たちは寿司を握っている。

精神科医 3 あ、波。

囚人たちは寿司をほり出してウエーブで対処する。

精神科医2 …海はすべてを洗い流して行きます。執着も過去も、そして貧富の差も。
精神科医1 そして今は、夏。

囚人たち、額の汗を拭う。再び網を引き続ける。

精神科医2 あ…。あれは！…鮫だ！

囚人たちは驚き恐れる。

精神科医2 季節はずれの鮫の襲来に逃げる暇もなく一人が足を噛まれてしまいました。

権田原、足を噛まれ、苦しむ。

権田原 うおおお、いてえ…いてえよー！

精神科医3 あたりは血の海！…です（精神科医2の顔色を窺う）…か？

精神科医2 （おうように頷き）あたりは血の海です。

精神科医1 冷静に対処して下さい。

精神科医2 仲間が苦しんでいます。どうしますか。

***ネタ差し替え

精神科医2 どうやら持ち直したようです。

精神科医3 そして大きな波が！

囚人たちウエーブ。

精神科医2 波はすべてを洗い流してくれます。

精神科医1 そして今は、夏。

囚人たち、額の汗を拭う。そして地引き網を…

精神科医2 ここは山です。高いたかい山の頂上がもうすぐそこまで迫っています。

囚人たちは慌てて山に登り始める。

精神科医2 頂上です。

囚人たち、頂上を極める。

精神科医1 何が見えますか？

囚人たち、空の一点を見る。

精神科医1 なにか見つけましたね…。

精神科医2 さあ、それはなんですか？ もっとよく見ましょう。

精神科医1 もっとよく。

精神科医2 よく見るんです。

精神科医1 よく見るんです。もっと。

精神科医2 よく、見るんです。

水内 やめる…。

精神科医たち ……。
水内 やめろッ！

水内以外の囚人たちの動きがすべて止まる。

水内 ……。

水内、立ち尽くしている。
ザザッと、風が吹いて、木立ちがゆれ、葉がさわぐ。
あの娘が、見ている。

水内 ……。

かすかに、非常にかすかに、女の笑い声が聞こえる。

水内 誰だ。

それに答えるかのように、あるいはまたことさら無視するかのように、風の音か女の笑い声か、判別つかないその音が響く。

水内 ……！ でてこい……！

意味をなさない叫び声を上げて、水内は暴れる。
その水内を、精神科医たちはじつと凝視している。
水内、地面に突っ伏して、息を切らしている。

精神科医2 ……本日のカウンセリングをすべて終了します。

ジリリリ…とベルが鳴る。

囚人たちはのろると独房エリアに戻ってゆく。

水内は一人残っている。
精神科医たちは水内を見ている。

ACT・09 精神科医・水内編

囚人たちは独房エリアへ去り、水内と精神科医たちが残る。

精神科医 1 それで…？

水内 それだけです。

精神科医 2 何が見えたの？

水内 …。

精神科医 1 水内さん。

水内 若い女がいて…俺を見ている…。見たことのある女の子だ。俺は、ずっと、長い間見ていた。あの女の子を…

精神科医 2 思い出して。

精神科医 3 思い出して。

精神科医 1 思い出して。

水内 あの女の子を、俺は殺したんだ。首を締めて…殺した。

精神科医 1 そうよ。あなたはその子を殺した。

精神科医 3 その時。

精神科医 2 その時に。あなたは見た。

精神科医 1 正直に、感じたままを…。

水内 …鳥だよ。黒い鳥だ。

精神科医 2 その正体を私達は知りたい。

精神科医 1 皆同じものを見た。

精神科医 2 同じものを。

精神科医たち、散開して退場してゆく。
ひとり残る水内は、暗闇で獣のように目を光らせている。

水内 あの女は…誰だ…あれは、俺は知っている…確かに知っている…誰だ…出てこい…

暗転。

ACT・10 所長の部屋

暗転明け。精神科医1がいる。
そこへ権田原（ブラックバード）が登場する。

B B ああ疲れた。ちょっと休ませてくれ。

精神科医1 びっくりしたあ…なに？ どのから入ったの？ あんたお客？

B B ああ、いいんだいいんだ。とにかく少しこのまま休ませてくれ。

精神科医1 だめよ、お客さんじゃなきゃ。

B B ああ？ 何の客だって？

精神科医1 何ってなによ、変な人ねえ。ヘルスよ、決まってるでしょ？

B B ああそう。ヘルスってなに？ 健康？

精神科医1 なにそれ？

B B おまえなんでそんなかつこしてんだ？

精神科医1 これが制服なんだもん。せいしんぶんせいきい、のかつこつだって、店長は言っていたよ。

B B はあん。

精神科医1 でね、お客さんはそういう患者になって、それで、エスエムなんかするの。

B B ああ、そつかあ、もう世紀末だもんなあ。

精神科医1 フフ。

精神科医1はわけも分からず納得して笑っている。

精神科医1 ねえ、名前なんて言つの。

B B 俺か、俺はな…

精神科医1 …。

B B 耳かせ。

精神科医1、素直に顔を寄せる。

B B …。

精神科医1 ウキヤー！

B B なんだよ。

精神科医1 くすぐりたい！

B B …。

精神科医1 …はあはあ…ああ、くすぐったかった。死ぬかと思った。

B B まだなんにも言っていないだろうが。

精神科医1 だってあんた、息荒いんだもん。ねえ、興奮してんの？

B B 別にしない。

精神科医1 嘘。してるんだ。

B B なんだかなあ…。

精神科医1 ねえ、名前教えてってば。

B B だから耳かせて。

精神科医1 …。

精神科医1はクスクス笑いながら、今度は用心しながら耳を近づける。
 BBはその耳に口を寄せる。

精神科医1 …うう。(くすぶったさに耐えている)

BB …。(言いかける)

精神科医1 うは。はっ。ほほー。

BB オマエ聞く気あんのか？

精神科医1 ごめん、ちゃんと聞くから。

BBは精神科医1の耳元で囁く。

BB ブラックバード。

精神科医1 …。

BB (口を離して)わかったか。

精神科医1 なにそれ。

BB 俺の名前だ。

精神科医1 …。

BB なんか文句でもあるのか。

精神科医1 地獄に堕ちろー！

BB それはブラックエンジェルだろオマエは。

精神科医1 …。

精神科医1、暴走族の真似をする。

BB …？

精神科医1、どうやら「ブラックエンペラー」といいたいようだが、似てもにつかない。

BB …なにそれ。

精神科医1 (真似)

BB …。暴走族？

精神科医1 (そうそう)

BB ブラックエンペラー？

精神科医1 (そうそうそう)

BB 年がばれるぞ。

精神科医1 お互いにね。

BB ブラックバードだよ。

精神科医1 変な名前。

BB よけいなお世話だ。

精神科医1 でもかつこいいよ。ちょっと。

BB オマエ、ちっとも緊張してないな。

精神科医1 なんで？ なんで緊張すんの？

BB なんでってオマエ、こんな経験はなあ、滅多にできないんだぞ。

精神科医1 どうして？ どうしてできないの？

BB 俺は滅多に人前には出てこないからだ。

精神科医1 なんで？

B B 少しは自分で考えろよ。
精神科医 1 …。

精神科医 1、考えている。

B B 考えてるのか？

精神科医 1 うん。

B B なにを？

精神科医 1 …。わかんない。

B B どうして俺が滅多に人前に出てこないか、だろ。

精神科医 1 あ、そうか。

B B そんなことオマエが考えて分かることか？

精神科医 1 わかんない。

B B じゃあ考えるな。考えてもわからんことは考えなくていい。

精神科医 1 うん。わかった。

B B 素直だな。

精神科医 1 ねえ、もう三十分たったよ。ほんとにしらないの？

B B したいのか？

精神科医 1 ええ？ いやあたしがしたいとかしたくないとかじゃなくて…そりゃあた

しは仕事だからね、したくないたってしなきゃおまんこの喰い倒れなわけじゃないの。

B B おまんまの喰いあげ、だ。

精神科医 1 ちよつと待って、途中で話がそれるとなに話してたかわかんなくなっちゃ

うんだから。

B B そりゃ失礼。

精神科医 1 そりゃさ、したい時だつてあるわよ。あるけどさ、したい時にしたいつて

おもっちゃうと、したくないときにしなくておまっちゃうので、それは「まっちゃうでしょ？」

B B なにいつてんだ？

精神科医 1 なにいわせんの？

B B まあ、よくわかんないけど、仕事するのは何事も大変だよなあ。

精神科医 1 あんたは仕事なんなの？

B B 俺か？ 俺はまあ、存在自体が仕事かな。

精神科医 1 へえー。

B B おまえ分かってないだろ。

精神科医 1 うん。

B B さて、そろそろいくか…。

精神科医 1 いっちゃうの？

B B うん。今夜はな、フェスティバルなんだ。

B B は退場していく。

精神科医 1 も退場

夜になってゆく。

ACT・11 フェスティバル

夜。

音楽が流れ出す。

踊り子登場。

踊り子は囚人達を挑発するように踊る。

ひとりの踊り子と蒲郡の目があう。

蒲郡
…！

叫びかける口を踊り子の手がふさぐ。

その瞬間が近づいていることを踊り子だけが知っている。

チラリ、と踊り子が壁の時計に目を走らせた刹那、

ドーン！ と巨大なブレーカーが落ちる音とともに、音楽と明かりが消失する。

なにかのモーターが電源の供給を断たれて回転を落としてゆく音が、飛行機の急降下の音のように暗闇に響く。

囚人達の騒ぐ声が暗闇から聞こえ、それも遠くなつてゆく。

ACT・12 脱走

暗転明け。

美津枝の部屋。

大きな袋をやつとの思いで引つ張ってくる美津枝。
その場にへたり込む美津枝。

美津枝 やった…とうとう…やったわ。

袋から水内がモゾモゾと這い出す。

美津枝、後ろから水内に飛びついて抱きつく。

美津枝 風さん！

水内 …。

美津枝、水内に抱きついたらまま、ピョンピョンとはねる。

美津枝 とうとうやったのよ。ねえ！ すごいでしょアタシ！ アタシが風さんを脱獄させたんだよ！ ねえねえ！ アタシ偉いでしょ？ ずっと考えたんだア…どつやったら風さんを連れ出せるかって…。びっくりした？ こんなにうまく行かないって思わなかったでしょ？ あたしも！ でもうまく行ってよかった！ アタシ天才かなア天才かも知れない。スゴイでしょ？ ねえ、あたしの踊り見たでしょ？ あたしね、きいてよ風さん。あたしき、クッククック、ダンサーになったの。おどろいたア？

美津枝、ようやく水内の顔を見る。

美津枝 …アンタ、誰。

水内 …。

美津枝、とびはなれて、用心深く水内をながめる。

美津枝 誰なのよ！

水内 人違いしたんじゃないのか。

美津枝 どういうことよオ！

水内 オレはその、風さんとか言っ奴じゃないぜ。

美津枝 分かってるわよ。見れば分かるわよ。だからアンタ誰よ。何でこんなところにのよ。

水内 そりゃあこっちのセリフじゃないかな。まあ、オレが誰でもたいした問題じゃないだろ。問題はあんたが脱獄させる相手を間違えたってことだよ。

美津枝 ウソ…。

水内 ウソではない。

美津枝 「冗談でしょ。」

水内 冗談なんか言う気にはなれないな。

美津枝 どっかに隠れてんでしょ。あの人はどこ？ あんた、あの人の仲間なんでしょ？

蒲郡風太はどこ？

水内 刑務所の中だな。

美津枝 そんなのイヤア！

水内 …。
 美津枝 なんですよ、こんなことってあるの？ アンタなんの恨みがあってこんなヒドイことすんのよ。

水内 …。
 美津枝 ヒドイよ。こんなのヒドすぎるよ。バカバカバカ。

美津枝、ジタバタ暴れる。

水内 …。

美津枝 なに黙って見てんのよ。少しは責任感しなさいよ。

水内 オレに何の責任があるんだ。

美津枝 何よ、落ち着き払っちゃって！

水内 …。

美津枝 どうせアタシはバカよ！ 何カ月も考えて、慎重に慎重に準備してさ、やっとの思いで成功したと思ったのに…肝心なところでドジ踏んで、さぞおかしいでしょよ。

水内 …。

美津枝 おかしいんでしょ、笑いなさいよ！

美津枝 …。

美津枝 笑え！

水内 …。

水内、口の端を上にはひん曲げる。

美津枝 何よ、そのひきつった笑いは！

水内 別に笑いたい気持ちがないんだ。

美津枝 じゃア、いいわよ。でもね、アンタ、アタシのおかげで出られたんだからね。

人違いでも、あんたのこと出してやったんだから。感謝されこそすれ、バカになれるスジ合いはないんだからね。

水内 別にバカにしたい気持ちにもならないようだ。

美津枝 じれったいわね、アンタ。うれしいでしょ、自由になれて。うれしいって言い

なさいよ。そうでなきゃアタシのしたこと、丸っきり無意味じゃない。そうでしょ？

水内 そう言われても…

美津枝 うれしいでしょ！ 出られて！

水内 …。

美津枝 どうなのよ！

水内 特に、うれしくはない。

美津枝 強情ねえ…。何でうれしくないのよ。自由になれたのよ。

水内 …。

美津枝 あんた、ひよっとして、足りないの？

水内 …。

美津枝 …。

美津枝、根負けして、大きくタメ息を吐く。

美津枝 …最低だわ。何でこんなことになったのかしら…。
 しばらくして美津枝は男物の服を取り出して投げ出す。

美津枝 …。

水内 …。

美津枝 なによ。服がそんなに珍しい？ それ、あの人にとまって用意したのよ。別に
 もう持っても仕方ないんだから、アンタにやるわよ。

水内 なんてだ？

美津枝 なんてでってなによ？ アタシがそんなもん後生大事に持っても仕方ないから
 アンタにやるって言うてんのよ。何か文句あんの？

水内 別にないよ。

美津枝 さつとしなさいよ、人の好意を無にするつもり？

水内 オレはここにいていいのか？

美津枝 どういう意味？ あんた、どうせ行くところないんでしょ？

水内 まあな。

美津枝 かくまっただげるわよ。だって仕方ないじゃない！

美津枝、大股に退場。

水内、ぼう然とその場に座り込む。

ACT・13 夢・娘・美津枝

夢。水内は座り込んだ位置で眠っている。
美津枝と蒲郡。

美津枝 ねえ。昨日の夜、大きな音したでしょ。

蒲郡 音？ 何の？

美津枝 ガス爆発かなっていったじゃない。

蒲郡 ああ。

美津枝 あれね、花火だったんだって。

蒲郡 ふっん。

美津枝 新聞にもものつたんだってよ。

蒲郡 風呂沸いてるぞ。

美津枝 六尺玉つて言つの？ それが爆発して、花火師のおじいさんが死んじゃったんだって。だからね、その音だったんだよ、アレ。五尺玉だか六尺玉がね、爆発したんだって。それで七十歳のその道一筋っていう花火職人の人が、死んじゃったんだって。店の子が話してたの聞いて昨夜のことを思い出したの。遠くのほうでさ、ドーンて聞こえたじゃない？

蒲郡 ああ。

美津枝 あれがそうだったんだなアって。

蒲郡 そうか。

美津枝 ご飯は？ 食べた？

蒲郡 いや。

美津枝 あたしもまだなの。食べる？ 何か作ろうか？

蒲郡 ああ。作ってくれ。

美津枝 あいよー。

美津枝、料理を始める。歌を歌いながら。

蒲郡 女はいつも危ついでところで身をかわす。それで私と彼美津枝は続いていた。危険を避ける本能が女には備わっている。女は私を愛していたのかもしれない。私はいえ、無論、愛など無かった。愛こそが最終目標だと公言してはばからない人々の気持ちは、私には分かる。私と同じだ。私も彼らと同様、訳も分からぬまま、犯罪に引きつけられ、乞食のようにそれを追い求め、その価値を立証するために身を投げ出す。まったく同じだ。たとえ彼らの方で、同じ扱いは迷惑だと眉をひそめられようとも。

美津枝 風さん。出来たよ。ものすごくすごいテキトーにカンで作ったご馳走。
蒲郡 ものすごくすごい、ってところが気に入った。

美津枝、食事を運んでくる。(無対象)
しばらく食事が続く。

蒲郡 美津枝。

美津枝 ん？

蒲郡 今夜からしばらく家を明けるよ。

美津枝 …。またなんかするの？ やめてよ！
 蒲郡 金は自由に使っていていいから。
 美津枝 あたしもつれてって。

蒲郡は無表情に女をみる。
 無言のままきびすを返し、女から離れる。

美津枝 まってよ！

蒲郡 あばよ。

美津枝 足手まといになんかならないから。つれてってよ。

蒲郡 もう足手まといだよ。

美津枝 あんたのいるところに行きたいのよ。あんたの仲間になるよ。あんたの女じゃなくていいよ。あんたが本当にいるところに行きたいのよ。あんたの中に入りたいのよ。あたしにも 賭けさせてよ。

蒲郡 …。

美津枝 断らないで。私を受け入れてよ。もう、ここへ戻ってこれなくていいから。

蒲郡 おまえは…。

美津枝 …。

蒲郡 おまえには、あの黒い鳥が見えないんだ…。

蒲郡、退場。

美津枝、退場。

美香登場。

美香 なに考えてんの？

水内 ン。別に何も。

美香 ふっん。

水内 そこ座ると汚れるぞ。

美香 ン、平気。

水内、タバコの箱を取り出すが、空である。
 箱を握りつぶす。

美香 タバコ、ないの？

水内 うん。

美香 買って来ようか？

水内 イヤ、いいよ。別に吸いたくないから。

美香 嘘、吸いたいでしょ。

水内 いや、いい。朝から結構吸ったから。

美香 どれくらい？

水内 10本くらい、かな。

美香 …おとうさん、少し禁煙した方がいいんじゃない？

水内 そうかな。

美香 一日何本くらい吸ってる？

水内 ン…2箱と、半分くらいか

美香 それって吸いすぎじゃない？

水内 そつでもないさ。

美香 おとうさんって、いつからタバコ吸ってるの？
 水内 ……いつからかな、よく憶えてない。
 美香 高校生くらい？
 水内 たぶん…そうかな
 美香 中学でも吸ってる子いるよ。
 水内 美香の友達でか？
 美香 そう、ね。

美香、ちよつと警戒する。

水内、そんな娘を愛しそつに見ている。

水内 俺の時は中学で女の子は吸ってなかったな、たぶん。
 美香 どうかなー。
 水内 なんだい、どうかなって。
 美香 女の子はそういうの隠すのうまいんだよ。
 水内 ああ、そうか。
 美香 おとうさんってそういうの、全然鈍そうだから。
 水内 そうかな。
 美香 そうかもな。
 水内 おとうさん、今までに禁煙したことないの？
 水内 ああ、ないよ。
 美香 しようと思っただけでもないの？
 水内 おまえが生まれたときに、しようと思ったな。
 美香 へえ。でもしなかったの？
 水内 うん。でもおまえが幼稚園に行く前は、家の中では吸わなかった。吸いたくなつたら外に出て、一服して、戻ってはおまえの顔を見て、また外へ出て…
 美香 大変だね。
 水内 たいへんさ。でもな、外でタバコ吸っていると、すぐにおまえの顔がみたくなくなるんだよ。

美香、笑つ。

水内 なんだよ？
 美香 あたし、小学校の時にさ、おとうさんのタバコ、隠れて吸ったことあるんだ。おとうさんがいないとき、どんな味がするんだろつって思つて。
 水内 どんな味だった？
 美香 あんまりよく憶えてない。とにかくすごく気持ちが悪くなって、ベッドにつかずまってじつとしてたのだけ憶えてる。そしたらおとうさんが帰ってきて…
 水内 ああ、やっぱりあの時か。
 美香 おとうさん憶えてるの？ 嘘でしょ？
 水内 憶えてるよ。おまえが小学校3年の夏休みだったな。仕事から帰ると顔色真っ青なおまえが出てきて、おかえりなさいって言ったんだ。俺が、どつしたんだ具合でも悪いのかつて聞くとおまえは、必死で首を振つて、何でもない何でもないっていつてな。

美香 信じらんない。なんでそんなに憶えてるの？

水内 なんでも憶えてるさ。おまえのことなら。

美香 なんかわいいな。へたなことできないもんね。

水内 そんなことないよ。おれは美香のこと信じてるよ。

美香 隠れてタバコ吸っても？

水内 知ってたよ。

美香 ホントに？

水内 わかるさ、そりゃ。ケムリは残ってるし、においはするし。

美香 なんだ。知ってたのか。ずっと秘密にしていたなんか損しちゃった。

水内 そうか？ じゃ、いわなきゃよかったな。

美香 ねえ、おとうさん。

水内 ん？

美香 ママのことも、そんなによく憶えてる？

水内 ああ。

美香 美香のことと同じくらい？

水内 どうかな。

美香 思い出すこと、ある？

水内 いや、あまり思い出さない。

美香 そう…

水内、娘の髪をゆっくりと撫でている。

水内 ひとつ、想いだした。

美香 なあに？

水内 禁煙したことがあったな、一回だけ。

美香 なんだ、ママのことかと思った。

水内 だからママのことだよ。

美香 …？

水内 ママがまだ高校生だった頃だ。

美香 じゃあ、美香が生まれる前だね。

水内 うん。

美香 それがなんで禁煙と関係あるの？

水内 ママが大学受験の時だよ。おれはその時大学一年だった。ママが受験に失敗しないように、何か願をかけようと思って、それで禁煙したんだ。ママ大学に受かるまでタバコは吸わないって。

美香 へえー。それ、どのくらい？ いつから禁煙始めたの？

水内 思いついたのが、受験日の前の日だったから、合格発表まで正味2週間くらいかな。

美香 なあんだ。

美香、笑いだし、つられて水内も笑う。

水内、笑う娘をいとおしそうにみている。

水内 それでもその時は苦しかったんだぜ。落ちたらどうしようって思ったな。
美香 で、ちゃんと受かったの？ ママ。

水内 ママの頭が良くて助かったよ。合格発表の日一緒に見に行って、掲示板の前で服した。

美香 おいしかった？

水内 おまえと同じさ。頭がくらくらした。

美香 ねえ、おとうさん。

水内 …ん。

美香 もしさ、あたしが結婚するっていったらどうする？

水内 そりゃ、そのうちするだろうよ。

美香 今。いまするっていったら。

水内 おまえまだ中学生だぞ。

美香 だから例えは。

水内 そうだな…。相手の男を殺しちゃうかもな…。

美香は黙っている。

美香 あ、あれ見て。

水内 なんだ。

美香 ほらあそこ。……………鳥。

夢から覚めると美津枝の部屋。

美津江 (登場) ……なに考えてるの。

水内 …別に。

美津江 そればかりね、あんたは。

水内 …。

美津江 黙ってるか、何か聞いても別にとかまアとかそんな返事ばかり。いいかげんムカついてくるわ。

水内 …。

水内、聞いているような、いないような顔であらぬほつを見ている。

美津江 何とか言いなさいよ…。

美津江、ピリピリと癩癩を起こし始めている。

美津江 あたしに何か文句でもあるの？ アンタを連れ出したのはよけいなお世話だったワケ？

水内 …。

美津江 そうよね。アタシが間違っただけでアンタを逃がしたただけもんね。別にアンタが逃がしてくれて頼んだワケじゃないわよね。

水内、黙って遠くを見ている。

美津江 アンタなんかオリン中にいようが外にいようが同じじゃないか。ただ黙って何か考えるだけ。なに考えてんだか知らないけどさ、ヘイの中にいたほうが良かった？ そうならそうと言いなさいよ。なによ… その顔は…

美津江、水内に食ってかかる。

美津江 こっち向きなさいよ！ アタシだってアンタのこと無理矢理脱走犯にしちゃったワケだから、そりゃ責任感じてるわよ。だからこうやってアンタかくまって面倒みてんじゃないのよ。なにが不満なのよ！ 一体！

水内 なにも不満なんかない。

美津江 じゃあなんだって毎日毎日面白くもない顔してボンヤリしてんのよ。一体その頭中でなに考えてんのよ。少しくらい考えてることアタシに喋ってくれたっていいじゃないよ。アンタなんか…アンタなんか…

水内 …

美津江 どうせアタシのことなんか眼中にないんでしょ。話したって仕方ないって思っ
てんでしょ。

水内 …。

美津枝をいきなり包擁する。

美津枝 …。

水内 …こわいんだよ。

美津枝 …大丈夫よ。

水内 俺は、あの時、みたんだ…黒い鳥が羽を広げているのを…

美津枝 …。大丈夫。あたしも、見たから…。

水内 …。

美津枝 私にとっては風さんがそうだったの。きっと。だから、わかっ
てしまえば怖くないわ。だから勇気を出して。逃げないで立ち向かって。逃げちゃだめ。それと向きあつて、……………対決なさい。

美津枝は退場。水内残る。

そこは夢で見た山頂である。

ACT・14 BB

BB (権田原) 登場。

BB もしもし。

水内 はッ。

BB こんなところで何をしているんです？

水内 何も…ただ、待っているんです。

BB ははア、あなたもですか。

水内 他にも誰か、ここで待っている人が居たんですか？

BB ええ、たくさんね。

水内 たくさん？

BB そう、たくさん。だいたいね、待つのが好きなんですよね。みんなね。何かを待っている。口をあけて。親鳥が餌を運んでくるのを待つようにね。

水内 …あの。

BB なんでしょう。

水内 私はどうしてここに居るんでしょう？

BB …。

水内 私は誰を待っているんでしょう？

BB …。

水内 私は…誰なんでしょう…。

BB そういったことは、まあどうでもいいことなんじゃないでしょうかね。

水内 …どうでも、いい？

BB そう。完全に。たとえばここは私の部屋で、あなたがガスの集金人で、あなたが部屋の主人であるわたしを待っている、ということにしても、いいわけですよ。ガスの。

BB そう。あるいはここは家庭裁判所の待合室であり、あなたは奥さんとの協議離婚が不成立に終わって、これから裁判に望む若い夫であり、廷吏が呼び出しに来るのを待っている、ということにしたところで何ひとつ不都合はない。

水内 廷吏が…。

BB あるいはここが天にも届かんばかりの山の山頂で、あなたはその山頂を極めた登山家であり、そこで何か人智をこえた啓示を待っているということにしたいのならそれはどうぞ御自由にと言う他にありません。

水内 人智ですか。

BB そう。

水内 どれもピンとこないんですが…。

BB ああ、そうですね。

水内 はア…。すみません。

BB イヤイヤ、別にあやまってもらうつなコトじゃないでしょう。

水内 …あなたは、誰なんですか？

BB 私？ 私はホラ、なんていうか、トンデン兵みたいなものでしょうかね。イヤ違うな。なんて言うかな。イヤ、トンデン兵は忘れてください。そうじゃなくて、そうだな、翻訳者のようなものか。

水内 ホンヤク？

B B あ、イヤイヤ、忘れてください。違うんだな。なんて言うんだろ。私はここに居るんですよ。ただいるだけなんだけれどね、まア、必要があって、ここにいるわけです。まア社会党みたいなもんかな。自分じゃなにをするわけでもないです。あ、イヤイヤ、忘れてください。別に特定の政党や特定の宗教と関係があるわけでもありません。ホントですよ。ホントですよって言うのとたんに嘘臭く聞こえちゃうのはどうしてなんでしょうね。ホントに、ホントです。ますます嘘臭いですか？ 弱ったな。別にね、何かお祈りしたりビデオ見せたりアンケートとったりするわけじゃないですから。何をしてもないんですから。信じてくださいね。

水内 ハア。

B B あ、よかった。イヤア、自分のこととなるとなかなか難しいですよ。要するに私は悪魔なんだけれど、とかく人っていうのは先人観を持ちやすいですからねエ。私は悪魔でございまして言ったらどう思われるか分からないじゃありませんか。

水内 アクマなんですか、あなたは。

B B え、まさか。私はそんなもんじゃありません。

水内 でも、今。

B B 大体ね、悪魔っていうのは外人でしょう、ねエ。神とか悪魔っていうのはアレは西洋の人が西洋の言葉で考えたものを日本語に訳してるだけであってね。私はまア、翻訳家という職業柄、言葉の起源については多少ウルサイというか、気を使っているんですよ。あんまりね、実体のない言葉だけをフワリフワリと浮かべているとね、自分の皮膚がね、どんどん薄く薄くなっているって、最後には弾けてしまってドロリと中身が流れ出しちゃうなんてことになってしまっても知れない。ね。言葉は慎重に使わないとね。

水内 ああ、ではやはりあなたは翻訳の仕事を…

B B とんでもない。私はそんなもんじゃありませんよ。

水内 でも、今。

B B 翻訳っていうのはね、言葉を言葉に移しかえることですよ。言葉っていうのはこれはもう言葉っていうぐらいでね、魂が乗り移っているわけです。人間にとつてはね、言葉は世界を征服する手段なわけです。わたしは嫌いです。ええ、言葉のない世界こそホンモノです。アナタも私と一緒に山に登ってみませんか。山はいいですよ。言葉なんていかにちっぽけで不完全なものが分かります。それはもう強烈なショックです。しかもそれをあらわす言葉がない。こわいですよ。こわいけど、それがいいんです。

水内 ではやはりあなたは登山家…

B B 違うって言うてるだろ！ この馬鹿！ 私が何ものかまだわからんのか！ この馬鹿！ 馬鹿馬鹿！ よっく見る。この私は…神だ！ 私は全てを見る。全てを聞く。全ての人間のおそれと罪をこの身であがなう。それが神だ。それが私だ。全能であり無知である。合掌。

水内 …。何なんだこの人は。

B B あなた、ひよっとして気が狂ってるんじゃないやありませんか。

水内 ハア？

B B 自分が狂ってると感じたことはありませんか？

水内 何でそんなことを聞くんです？

B B ということはあるんですね？

水内 別に…ありませんよ。

B B あ、いま、ちよつと考えましたね。あるんですよ？ 実はあるんですよ？

水内 ありませんよ。

B B 隠さなくてもいいでしょう。

水内 隠してませんよ。

B B またまた。

水内 隠してません。

B B 誰かに許してもらいたいと思ったことがあるでしょ。

水内 ないよ。

B B いつも不安で憂うつでしょ？

水内 ないっていつてんだろ。

B B あなたは今勢いだけで私の質問を否定しているでしょう。

水内 うるさいな。

B B あなたは今凶星をつかれてカツとして怒鳴ったでしょ？

B B …。あなたは今、さらに凶星をつかれて、もう相手にするもんかという態度をとる

ことで自己防衛に走っている自分を自覚しつなすすべもなく黙っているんでしょつ。

水内 …。

B B 自分に正直になりましょう。

水内 正直に…。

B B そつ、正直に。ありのままに…。

いつの間にか、精神科医たちが、二人を取りかこんでいる。

水内 俺はその時、本当は狂ったのかも知れない。

精神科医1 いいえ、あなたは狂ってない。あなたは。

精神科医3 おとうさん。お願い。お願いだから。

独房エリアの幕が落ちてゆく。

そこには囚人たちがいる。

水内 娘の相手が憎かった。それは確かだ。でも、本当にそれだけだったのか。俺には

今でも分からない。

精神科医1 何を見たの。わたしはそれが知りたい。みんな、同じものを見てる。おな

じ何かを。見ている。

精神科医2 みんな同じものを。

精神科医1 同じ何かを。

囚人たちは顔を上げる。

水内 必死で男をかばい、許しを乞う娘の姿が目には焼きついて離れない。あれは本当に娘だったのか。俺の愛した娘だったのか。

精神科医3 お父さん。お父さん。

精神科医1 思い出して。何を見たの。

水内 あの女は、誰だったのか。俺の娘だったあの女は…。

精神科医3 おとうさん、お願い。やめて。

水内 おれは…。

精神科医2 そしてあなたは見た。

水内の背後のBB、両手をゆっくり鳥のように広げ、首を絞めるために歩み寄る。

水内 おれは…

精神科医3 お父さん。

精神科医2 言って！ あなたは何を見たの？

水内、振り返る。

BB 私が何に見えますか？

水内 あなたは…私に見えます…。

BBは踵を返し、ゆっくり独房エリアへ戻ってゆく。

水内その場で動かない。

ACT・15 外へ

BBが戻ると囚人たちは静かに囚人服を服を脱ぎ捨てる。
精神科医たちは役目を終えたようにゆっくりと崩れ落ちていく。

囚人たち、囚人服の下にはそれぞれ明るい色のシャツと、淡い色のスラックスを付けている。

囚人たちは静かに囚人服を脱ぎ捨て、生まれて初めて空を見上げる人のように空を見上げる。

落ち着いた足取りで、彼らは歩き出す。

彼らの目に映るもの全てが、風に吹かれていく。

囚人たち（今や普通の服を着た普通の人々）が立ち去る。

風の音。そして風の音に乗って、女の子の音が聞こえる。

それは、床に崩れ顔を伏せている精神科医たちの声でもある。

精神科医3 …おとうさん…おとうさん！…ねえ、いい天気だよ…

水内、顔を上げない。

精神科医1 おとうさんったら。……どっかいこうよ。気持ち良いよ、きつと…ねえ、

おとうさん…

水内、変わらず身動き一つしない。

精神科医2 おとうさん、寝てるの？ すごくいい天気なんだから、ちょっと見てもら

んよ。こんなに青い空、見たことないくらい…。

風の音には、そよぐ樹々の葉の擦れ合う音や、遠くの街のぎわめきが混じり合っているようにも聞こえる。

精神科医3 ねえ、おとうさん、…外に出てご覧よ。どこか行こう。きつと、気持ち良

いよ。…ね、外に出ようよ。

女の子の声が続切れ、ややあつて

精神科医1 …なアんだ、おとうさん、いないの…。

風の音は止んでいる。

水内、ゆっくりと顔を上げる。

立ち上がる。

そして、きびすを返し、去っていく。

精神科医たち、いつせいに、同時に顔を上げる。

精神科医たち おとうさん！

水内、その声にふと立ち止まり、振り向く。
風がまた吹き始める。

幕。(1993.11) (2003.06 改)